

日本語の存在構文とその存在構文からみた 動詞の意味と構文の意味とのかかわり

于 康

1. 存在文と存在構文

日本語研究において、「いる」「ある」を述語とする文は、存在文 (Kuno1973、柴谷方良1978、金水敏1982、登田龍彦2003、岸本秀樹2003、西山佑司2003等) または所有文と呼ばれている。Kuno (1973) は、日本語の存在文の基本語順が「場所-対象-ある」であると主張しているが、西山佑司 (2003) は、存在文を「I 場所表現を伴うタイプ」と「II 場所表現を伴わないタイプ」に分け、その「場所表現を伴うタイプ」を更に「i 場所存在文 (机の上にバナナがある)」、「ii 所在文 (おかあさんは、台所にいる)」、「iii 所在コンピュータ文 (おかあさんは、台所です)」、「iv 指定所在文 (その部屋に誰がいるの? …洋子がいるよ)」、「v 存現文 (おや、あんなところにリスがいるよ)」のように分類している。

一方、英語の場所格倒置構文に注目し、それを出発点に日本語の表現を考えたのが、Iwamoto and Kuwabara (1996)、Yamamoto (1997)、Nakajima (2001)、Ono (2001)、小野尚之 (2005) である。Iwamoto and Kuwabara (1996)、Yamamoto (1997)、Nakajima (2001)、Ono (2001) は、「英語の場所格倒置構文には、日本語の『～ニハ～ガ…テイル』という構文が相当する」としている。そして、小野尚之 (2005) では日本語の「～ニハ～ガ…テイル」を明確に「場所格構文」と呼んでいる。

このほか、佐治圭三 (1991) は陰題文の特徴に注目し、「中国語の文法で同種の文を呼ぶ名の「存現文」を採りたい」として、叙述部だけでできている文を存現文と呼んでいる。また「～てある」構文における「場所に十～が～Vてある」を「存在表現」(益岡隆志1987) や「結果構文」と呼ぶ説もある (一戸克夫2001など)。

要するに、存在文と呼ばれる文は「いる」か「ある」を述語とするものであるのに対し、「場所格構文」と呼ばれる文はTheme Locationを必須項に取り、「いる」「ある」以外の動詞を述語とするものである。「存現文」「存在表現」「結果構文」と呼ばれる文は「いる」「ある」以外の動詞を述語とするが、必ずしもTheme Locationを必須項に取るわけではない。

上述のように小野などは、「Lに+NPが+Vている」を一つの構文 (Lが必須項) として扱っているようである。しかし、「場所格構文」には、「Lに+NPが+Vている」だけではなく、他の表現形式も存する。また、「場所格構文」という言い方は、必ずしも「存

在」を顕著に明示するものではなく、「存現文」といっても中国語の存現文とはかなり異なる性格を有していると思われる（于康2006を参照）。そのため、ここでは「Lに+NPが+Vている」タイプの構文を、「存在構文」と呼びたい。

さて、「存在構文」の表現形式が「Lに+NPが+Vている」だけでないとするれば、他にどのような形式があるのか、その形式間の関係はどうなっているのか、どのようなタイプの動詞がそれぞれの形式に入るのか、動詞と共起するアスペクト形式はどのような意味機能を有するのか、などが問題になってくる。最も重要なのは、場所格の生起またはそれを必須項に取る条件とメカニズムである。そこで本稿では、以上の問題を意味論を中心に意味と構文の相関関係という視点から明らかにし、〈動詞の意味〉〈構文の意味〉と必須項指定とのかかわりをも考察したい。

2. 日本語の「存在構文」

2.1 定義

「Lに+NPが+Vている」タイプの構文を「存在構文」と呼ぶとすれば、一つクリアにさせておかなければならないことがある。それは、「Lに」は、任意項ではなく、必須項として共起させなければならないということである。ふつう、場所格は任意項を担い、それがなくても文の情報量の増減だけに影響するが、文そのものの成立には関係しない。つまり、文脈指示などがない場合、必須項の共起がなければ、文は成り立たないか不完全になるのである^①。「Lに」における任意項から必須項へシフトさせる条件や存在構文のタイプ及びVPの機能などについては後述するとして、「存在構文」の定義を次のようにしたい。

日本語の「存在構文」とは、ある場所にある物事が存在するという物事の存在を情景描写として捉える文のことである。場所格が必須項として二格で表示され、なおかつ文頭に置かれ、また「いる」や「ある」以外の動詞を述語に取り、「ている」または「れ・られている」または「てある」^②と共起するものでなければならない。

2.2 存在構文の分類と動詞の統語的・意味的機能

「Lに+NPが+VP」をキーワードにして、注^③の(1)に示される三作品を精査し、網羅的に用例を収集した。そして、その用例の分析結果をふまえ、他の作品やコーパスから収集した用例にしたがい裏付けを取ると同時に、反例があるか否かを確認した。その結果、日本語の存在構文は、次のように4つのタイプに分けられることがわかった。

- 1) Lに+NPが+Vている
- 2) Lに+NPが+Vれ・られている
- 3) Lに+NPが+Vである
- 4) Lに+NPが+Vれ・られてある

以下では、この4つのタイプの構文について、VPやNPの統語的・意味的機能、及び

VPとNPとの関係などを中心に詳細に考察していきたい④。

2.2.1 Lに+NPが+Vている

この構文には一つの大きな特徴が見られる。つまり、他動詞が使われていないことである。自動詞といっても、非対格自動詞と非能格自動詞といった統語レベルでも意味レベルでも異なる振る舞いを有するものがあるので、まず、非対格自動詞の例を見てみよう。

- (1)墓標の裏の藪に、子鹿の死骸が横たわっていた。(博士の愛した数式)
- (2)若い方の男が箸を持ったままふり向いて、いぶかしげな顔をした。シャツの背に大きな穴があいていて、日にやけた男の肌がのぞいていた。(人間の壁)
- (3)用足しをして三十分ばかり遅れた東が、雪亭の座敷へ入ると、十五畳と十畳の間を通した広間には、もうメンバーの顔が全部、揃っていた。(白い巨塔)
- (4)扉を開けると、それに取りつけてある郵便受けの中に二通の封書がはいつていた。(射程)
- (5)その頁には何人かの顔写真が並んでいた。(容疑者Xの献身)
- (6)草薙の携帯電話に、湯川からの着信記録が残っていたのだ。(容疑者Xの献身)
- (7)お常が現在の安心や未来の希望を覗く戸口には、重くるしい、黒い影が落ちているのである。(雁)

(1)~(7)に用いられる自動詞はすべて非対格自動詞である。ガ格で表す成分は、統語レベルでは主語であるが、意味レベルでは対象を表す。この構文では「テイル」との共起が義務づけられており、この「テイル」は動作進行中ではなく、結果状態を表すものである。

次に、非能格自動詞の例を見るが、その数は非対格自動詞の例に比べれば圧倒的に少ない⑤。例えば、

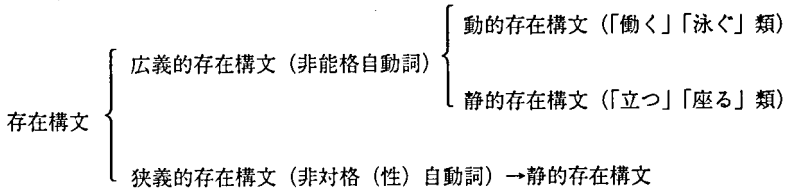
- (8)基盤の目のように組んだ高い足場の間に、黄色いヘルメットをかぶった大木組の作業員が、忙しくたち働いている。(白い巨塔)
- (9)石神がアパートに戻ると、部屋の前に一人の男が立っていた。(容疑者Xの献身)
- (10)階段を何段か上り大きなガラス戸を開けて中に入ると、受付に赤いワンピースを着た若い女性が座っていた。(語料庫・ノルウェイの森)

ここの「たち働く」「立つ」「座る」は何れも非能格自動詞である。しかし、すべての非能格自動詞がこの構文に用いられるわけではない。この構文に用いられるのは、「遊ぶ」「泳ぐ」「働く」「座る」「立つ」などのような極めて限られたものである。

非能格自動詞存在構文の場所格のマーカには、小野尚之(2005)が指摘しているような「『ている』がつかなければ場所の二格をとらない」もの(遊ぶ、泳ぐ、働く)もあれば、「ている」がつかなくても、二格をとるもの(立つ、座る)もある。従って、「Lに+NPが+非能格自動詞ている」は、更に「働く」「泳ぐ」類の非能格自動詞存在構文と、「立つ」「座る」類の非能格自動詞存在構文、のように二分類できるのではないかと思われる。前

者はミクロ的に見れば動作進行中という意味も読み取れるので、動的存在構文と呼び、後者は行為の状態が継続中という意味として読み取れるとしても、動作進行中という意味が読み取れないので、静的存在構文と呼びたい^⑥。

以上の考察をふまえ、日本語の存在構文は、更に次のように分類することができる。



広義的存在構文とは、非能格自動詞から構成されるものであり、狭義的存在構文とは、非対格自動詞または非対格性を有する動詞から構成されるものである。ここで主として検討したいのは狭義的存在構文の場合である。

広義的存在構文が狭義的存在構文と異なるところは、前者はミクロ的に見れば動作主の動作が進行中であることも含意するのに対し、後者は対象の存在または結果状態が継続中であることを表すという点にある。「公園には親子連れが遊んでいる」と「親子連れが公園で遊んでいる」との違いは、前者は場所格を物事の存在場所として捉えているのに対し、後者は場所格を動作が行われる場所として捉えているというところにある。ミクロ的に見れば、前者も物事の着点を持たず、「遊ぶ」という動作が進行中であるとも読み取れるが、マクロ的に見れば、動作進行中は不問とされ、「公園」という場所に「親子連れが遊んでいる」という物事が存在するという情景描写になる。従って「Lに+NPが+非対格自動詞ている」と「Lに+NPが+非能格自動詞ている」とは何れも情景描写に用いられるものであるが、静的存在として捉えるのか、動的存在として捉えるのかにおいて、両者は異なると言えよう。

2.2.2 Lに+NPが+Vれ・られている

この構文にも一つの大きな特徴が見られる。それは、他動詞は使われるが、自動詞は使われないということである。他動詞は有対他動詞と無対他動詞^⑦に分けられるので、まず、有対他動詞の例を見てみよう。

- (1) ボツテイチェルリの「聖アウグスティヌス」もその一例で、聖人の部屋に自然科学の書物や機械が並べられているのである。（語料庫・マッテオ・リッチ伝）
- (2) 席の上には、焼魚や煮つけや卵焼、握飯などをつめた三つ重ねの重箱がひろげられ、お酒を入れた土瓶や杯なども散らばっていた。（石中先生行状記）
- (3) 貞作も自分の運ぶ干草の中に、飛んでもない荷物が隠されていることは露知らず、（石中先生行状記）
- (4) 四角い箱に三十センチほどの棒が立っている。その棒に直径数センチの輪が通さ

れていた。(容疑者Xの献身)

この構文は、受動文という形を取っているが、動作主を必要とせず、なおかつ補おうとしてもできないのが顕著な特徴である。また、ガ格で表すのは何れも動作主ではなく、対象であるため、意味上では「Lに+NPが+自動詞でいる」と同じ機能を有するものと考えられる。

しかし、用例を考察してみると、有対他動詞は、すべて無条件にこの構文に入るわけではないことがわかる。その原因として、対応する自動詞が存在し、その「自動詞+ている」という形がすでに「有対他動詞+れ・られている」の役割を果たしているからと考えられる。従って、有対他動詞よりは、対応する自動詞を持たない無対他動詞の方が容易に受動文という形で存在構文を構成することになる。以下その用例を見てみよう。

(15) カードの裏にはプロフィールや記録が小さな字で書かれている。(博士の愛した数式)

(16) 白髪頭の男が鍋をコンロに載せ、何かを煮ていた。男の脇には一升瓶が置かれていた。(容疑者Xの献身)

(17) 未亡人は食卓の真ん中に腰掛けていた。面接の時と同じく、上品な装いだった。やはり左手には杖が握られていた。(博士の愛した数式)

(18) 写真に付された検査票には、「胃の粘膜正常」と検査の結果が記されていたが(白い巨塔)

(19) 待合室には、何本かの人の列が作られていた。(射程)

以上の考察をふまえて考えれば、「Lに+NPが+他動詞れ・られている」と「Lに+NPが+自動詞でいる」とは相補関係にあると見なすことができるであろう。そうだとすれば、この二つの構文が同じ文脈に現れてもおかしくないことになる。実際に調べてみると、両者が共起する文は容易に見つかるのである。例えば、

(20) 崩れかかった石の門柱には、「丸山金助」という陶器製の白い表札が出ており、門から玄関までのかなりの距離には小砂利が敷きつめられて、その両脇に松が疎らに植わっていた。(射程)

(21) 床の間には、軸の代りにベートーベンとドストエフスキーの肖像がかけられ、壁際の二つの書棚には、本がギッシリつまっていた。(石中先生行状記)

(22) 茶の間には、夜具や襦袢が散らばり、その中には上皮が剥がれて、綿が食み出ているものもあった。(石中先生行状記)

(20)~(22)において、その相補関係が見事に表されている。従って、「Lに+NPが+自動詞でいる」が情景描写に用いられるものだとすれば、同じ動作主を必要としない「Lに+NPが+他動詞れ・られている」も情景描写に用いられることになる。要するに、ここの他動詞の受動形は、「NPが」を対象にさせるために、動詞を非対格化させたものであり、ここのVPが非対格自動詞に相当するものと考えられる。

2.2.3 Lに+NPが+Vである

結果状態を表す表現として、これまでもよく議論されてきたのは、「動詞+である」という形式である(益岡隆志1987、佐治圭三1991、杉村泰1994、1996、影山太郎1996、原沢伊都夫1998、1999、2005、一戸克夫2001、小野尚之2005など)。原沢伊都夫(1998)では、テアル形をテイル形と対立する形式として捉え、他動詞+テアルと自動詞+テイルがお互いを補完する形で結果相の意味領域を形成するとし、対応する自動詞をもたない他動詞がテアルに使われると、対応すべき自動詞のテイルの意味を兼ねるとしている。

2.2.2で検討したように、存在構文において、「Lに+NPが+自動詞ている」と「Lに+NPが+他動詞れ・られている」とが相補関係であることが明らかになった。他動詞+テアルと自動詞+テイルがお互いを補完する形で結果相の意味領域を形成するとすれば、存在構文にも「Lに+NPが+Vである」というタイプの構文が使われてもおかしくないと思われる。調べてみると、数多くの用例が見つかった。例えば、

- (23)草薙は椅子にかけたコートのポケットから、一枚のコピー用紙を取り出し、テーブルの上で広げた。そこには男の絵が描いてある。(容疑者Xの献身)
- (24)家の南側の疎な生垣の内が、土を敲き固めた広場になっていて、その上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取った粟の穂が干してある。(山椒大夫)
- (25)右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶を据えて、その中に松の大きな枝が挿してある。(坊ちゃん)
- (26)両耳にいくつもピアスがしてあり、挙句、口元にも1個ある。(HPログコーパス)
- (27)ガラスケースの中に時計が置いてあった。ポロポロだったけど、しっかりと時刻がしるされてあった。(朝日DNA一聞蔵—2002年08月09日)

この構文において、用いられる動詞はもっぱら自動詞が使われる2.2.1と異なり、殆ど無対他動詞である。この構文は、ガ格で表すものが何れも対象であり、また、動作主を必要としないのみならず、補おうとしてもできないのも大きな特徴である。この点は、「Vれ・られている」と共通している。実際、(23)~(27)の「Vである」を「Vれ・られている」としても意味的には殆ど変わらないであろう。ガ格で表すのが対象であるとするれば、この「Vである」は非対格自動詞に相当するものとも捉えられる。従って、同じ文脈において、動作主を必要とせず、ガで対象を表し、場所格が文頭に置かれるという共通点をもつ「他動詞である」「非対格自動詞ている」「他動詞れ・られている」がそれぞれ他のものとともに現れてくることもありうる。たとえば、

- (28)ホーム炬燵の上にみかんが載っている。壁際にバドミントンのラケットが置いてあるのを見て、彼は懐かしい気持ちになった。(容疑者Xの献身)
- (29)授業を終えて職員室に戻ると、机の上にメモが載っていた。携帯電話の番号が記してあり、「湯川という方からTELあり」と雑な字で書いてある。同僚の数学教師の筆跡だ。(容疑者Xの献身)

(30)レッドロビンの生け垣には、離れに通じる古風なデザインの開き戸がしつらえてあった。よく見ると、扉には頑丈な錠前が掛けられていた。(博士の愛した数式)

(28)~(30)だけを見てもわかるように、単なる状態の継続かそれとも動作が行われた後に生じた結果状態の継続かにおいてはすこし違いがあるとしても、ここで用いられる「自動詞ている」と「他動詞れ・られている」「他動詞である」とは何れも動作主を不問にし、ある場所にある物事が存在するという情景描写に使われているため、相補関係にあると考えられる。従って、この「Vである」も動詞を非対格自動詞にさせるためのものであると見なしても良いかと思われる。実際、たとえば、

(31)机には大学ノートが積み上げてあり、ちびた4Bの鉛筆とクリップが数個転がっていた。(博士の愛した数式)

(31')机には大学ノートが積み上げられており、ちびた4Bの鉛筆とクリップが数個転がっていた。

(32)封筒の中にはA4のレポート用紙が入っており、そこには数式がびっしりと書き込まれていた。(容疑者Xの献身)

(32')封筒の中にはA4のレポート用紙が入っており、そこには数式がびっしりと書き込んであった。

のように、(31)の「積み上げてあり」を「積み上げられており」としても、(32)の「書き込まれていた」を「書き込んであった」としても、「V非対格自動詞ている」と共起できるので、表現される意味にはさほど変わりはないであろう。つまり、この「他動詞である」と「非対格自動詞ている」とは何れも結果状態を表すものであり、違うのは、他動詞が「テアル」形を取るのに対し、非対格自動詞が「テイル」を取るという点である。

2.2.4 Lに+NPが+Vれ・られてある

存在構文には、もう一つ、「れ・られる」と「てある」が合成したものがある。例えば、

(33)その引き出しの中には、電気レーザー、安全剃刀、香りの高いアフター・シェーブ・ローション、ポマード、クリーム、いずれも外国製品ばかりのそんなものが一揃い入れられてあった。(射程)

(34)鍋の縁に「八五円」という値段書が貼られてあるのも、チラと石中先生の目に触れた。(石中先生行状記)

(35)円陣の中央には、厚紙をかぶせたリング箱が立てられてあり、その上には、水筒が一個転がっており、箱の後ろには、例のバンド付のトランクが置かれてある。(石中先生行状記)

(36)路の両側に溝が掘られてあり、塩の結晶が積まれてあります。(結合価)

(33)~(36)のように、この構文は、前の3つのタイプと同じように、動作主を必要とせず、ガ格で表すものが何れも対象である。従って、この「Vれ・られてある」も非対格自動

詞に相当するものと見なして良いであろう。また、(37)~(39)のように、ある場所にある物事が存在するという文脈において、「非対格自動詞ている」「他動詞れ・られている」「他動詞である」との共起も見られることから、それらと同じ機能を有し、情景描写に用いられるものと見なすこともできるであろう。

(37) ストープといえば、鉄板の上には金網が載っており、厚く切ったサツマ芋が五、六切れ炙られてあった。(石中先生行状記)

(38) 石碑のある所に行った。高さ二尺ばかりの、何の変哲もない自然石である。もうとところどころに厚い苔が生じている。塚の前には、菊の花が二、三本さしてあり、台石の上には、コツコツの団子を盛ったお皿などが供えられてあった。(石中先生行状記)

(39) 板囲いには、新しい白ペンキが塗られ、こんな広告文が書かれてあった。(石中先生行状記)

しかし、この「他動詞れ・られてある」は、(37)を例にすると、「鉄板の上には金網が載っており、厚く切ったサツマ芋が五、六切れあった」のように、「炙られて」が「ある」の存在状態を表すものとも考えられるので、この「炙られて」を省いても情報減にはなるが、文の成立や意味伝達には影響しない。また、「鉄板の上にサツマ芋が五、六切れ置かれてあった」「鉄板の上にサツマ芋が五、六切れ焼かれてあった」「鉄板の上にサツマ芋が五、六切れ並べられてあった」のように、存在の状態を表す「炙られて」を他の状態表現に換えても良いことから、「ある」を本動詞とし、動詞の受動形を修飾語と見なすこともできるかもしれない。しかし、それについては、「Lに+NPが+Vてある」または存在構文以外の表現に用いられる場合の用法を精査し、総合的に考察する必要があるので、ここでは掘り下げないこととする。何れにしても、ガ格が動作主ではなく、対象を表すことには何の変りもないのである。

3. 「NPが+Lに+Vている」などは、「存在構文」ではないのか

英語や中国語に比べれば、日本語は語順の束縛が緩い。従って、「Lに+NPが+Vている」タイプの構文を存在構文だとすれば、「NPが+Lに+Vている」タイプの構文も存在構文と見てよいのではないのかという声も聞こえてきそうである。例えば、

(40) その横向さんが、早稲田大学のキャンパスに立っている。(語料庫・五体不満足)

(41) 「あなたのことがネットに書かれているんですって」と言われたのが去年の9月。
(HPブログコーパス)

(42) 平吉は今出川の暗い奥の間で、兄のよこで寝ているような錯覚をおぼえた。兄の渡瓶がまだわきに置いてあるような気がした。(語料庫・雁の寺)

(43) 「アンパンマン」第一話よりフィルム撮影してきたセルカメラ機材が重厚に展示

室に置かれてあり、十四年間働いてくれた感謝と敬意を重んずる館長の心意気を伺わせています。(HPブログコーパス)

しかし、語順の束縛が緩いとはいえ、最初に現れる成分が主題化されやすいということも否定できない。Kuno (1973) は、存在文の場所を主題化した場合と対象を主題化した場合とでは、解釈に違いがあると指摘している。Bresnan (1994) は、英語の場所格倒置構文が談話において提示機能を持つと述べて、倒置されたThemeを担う名詞句は、談話において提示的焦点をもつとされる。Bresnanのこの考えについて小野尚之 (2005) は、「談話構造上、ある場面が設定されると、その中の指示物が新しく注意の焦点の当たる対象となる。Bresnanは、「典型的な例では、場面は場所として自然に表現され、指示物は場所によって叙述されるもの、すなわち主題、ということになる」ことから、そのような提示的焦点は〈Theme Location〉という項構造を自然に選択すると主張する」とまとめている。

Bresnanのこの規則は日本語にも応用できると思われる。従って、「Lに+NPが+Vている」タイプの構文は、場所が焦点化された存在構文であるのに対して、「NPが+Lに+Vている」タイプの構文は、焦点化されたのが場所ではなく動作主または対象であり、しかもこの構文における「L」には任意項であるので、存在構文ではないと言えるであろう^⑧。たとえば、(42)の「その横向さんが、早稲田大学のキャンパスに立っている。」において、「(早稲田大学の) キャンパスに」は必須項ではなく、任意項であるので、それがなくても文の成立には影響を与えない。この構文において焦点化されたのは必須項の動作主「(その) 横向さんが」であるが、任意項の場所格「(早稲田大学の) キャンパスに」ではない。

4. 〈動詞の意味〉〈構文の意味〉と必須項指定とのかかわり

文が構成されるに当たり、何と言っても動詞の意味が共起項の選択に決定的な主導権を握っている。例えば、「太郎は、カードの裏にプロフィールを小さな字で書く」においては、「太郎」「カードの裏」「プロフィール」といった共起項が、動詞「書く」の意味によって選択される。動作主の「太郎」や対象の「プロフィール」が必須項とされるが、場所の「カードの裏」は任意項とされる。

「太郎は、カードの裏にプロフィールを小さな字で書く」は、動作主が「書く」という行為を行うということを描いている。しかし、ある場所(カードの裏)にある物事(プロフィール)が存在するということだけを述べたい場合、場所格が文頭に移動され焦点化され、動作主を不問にする操作が行われ、文は「カードの裏にプロフィールが小さな字で書かれている」ようになる。場所格が提示の焦点になるという用法は、使われているうちに固定化され、固有の事態構造(たとえばLに+NPが+Vれ・られている)を形成していくということである。すなわち、ふつう、動詞の意味に含有される項情報はすべて構文

へ投射されないが、一旦構文へ投射されると、その構文が使用されていくうちに意味が固定され、固有の事態構造となる場合、動詞意味レベルでの任意項が、構文意味レベルでは必須項になり、その構文として必要不可欠の成分となるということである。

要するに、存在構文における「場所格」は、動詞に含意されるものであり、まず任意項として選択されるが、使われていくうちに、ある特有の意味をもつ構文が形成され、任意項だった場所格が必須項として選択されることになる。場所格を任意項から必須項にさせたのは、まさに構文の意味である。つまり、文を構成するには、動詞の意味が重要であり、共起成分の選択に決定な役割を果たしているが、任意成分を伴う構文は使われているうちにその文の特有な意味を形成し、その特定の構文の意味も共起成分の選択に寄与するのである。

5. おわりに

上の考察で明らかになったことをまとめてみると、次のようになる。

1. 日本語には、存在構文と呼ぶべき構文が存在する。
2. 日本語の存在構文は、広義的存在構文と狭義的存在構文の二種類に分けられる。広義的存在構文は、「Lに+NPが+非能格自動詞ている」を指すのに対し、狭義的存在構文は、「Lに+NPが+非対格自動詞ている」と「Lに+NPが+他動詞れ・られている／てある／れ・られてある」を指す。広義的存在構文は更に動的存在構文と静的存在構文に分けられる。
3. 狭義的存在構文は、その具体的な表現形式として、次のように4つのタイプに分けられる。

1) Lに+NPが+Vている	2) Lに+NPが+Vれ・られている
3) Lに+NPが+Vてある	4) Lに+NPが+Vれ・られてある
4. この4つのタイプの狭義的存在構文は、何れも場所格を必須項に取る。
5. この4つのタイプの狭義的存在構文に用いられる動詞には、次のような特徴が見られる。1) 「Lに+NPが+Vている」に用いられる動詞は、ほとんど非対格自動詞であるが、非能格自動詞も見られる。両方とも存在構文を構成するが、それぞれが含意するものは異なる。2) 「Lに+NPが+Vれ・られている」「Lに+NPが+Vてある」「Lに+NPが+Vれ・られてある」に用いられる動詞は、何れも他動詞である。
6. 「Lに+NPが+他動詞れ・られている／てある／れ・られてある」における他動詞は、「れ・られる」「てある」によって非対格化され、非対格自動詞の役割を果たしているので、「Lに+NPが+非対格自動詞ている」と同じように、ガ格の成分は動作主ではなく、対象を表すものになる。

7. 存在構文に用いられるアスペクト形式は、何れも動作進行中ではなく、結果状態が継続中であることを表す。
8. 「Lに+NPが+非対格自動詞ている」と「Lに+NPが+他動詞れ・られている」「Lに+NPが+他動詞である」「Lに+NPが+他動詞れ・られてある」は相補関係にあり、何れもある場所にある物事が存在するという情景描写に用いられるものである。
9. 場所格は、最初、場所を含意する動詞の意味によって任意項としてその共起が求められる。これが場所格出現の意味基盤である。その文が使われていくうちに、動作主を必要としない、単にある場所にある物事が存在するという情景描写の表現になる。この場合、動作主が消えてしまい、場所格が提示の焦点となり、また、結果状態の存続を表す「ている」「れ・られている」「である」との共起により、存在構文を構成する。要するに、場所格を任意項として選択したのは動詞の意味によるものであるが、それを必須項にしたのは、構文の意味である。

文中にも触れたが、非対格自動詞でも他動詞でもすべてのものが自由にその形式に用いられるとは限らない^⑨。一体どのような動詞がこの構文に用いられないのかについては、更に掘り下げて、その動詞タイプを明らかにしなければならない。また、狭義的存在構文の4つのタイプは、それぞれプロトタイプとするものが異なるため、背景化されているものも違う。意味的に背景化されたものとつながっているので、ミクロ的に追求すれば、それらの間には違いが存するものも否定できない。それぞれの意味的連続体のメカニズムも明らかにする必要もあるが、これらを今後の課題としたい。

注

- ① 中国語の「存現文」は、「L（主語）+VP+NP（目的語）」という構造となり、場所詞が主語とされている。呉卸耀（2006）は、その主語の位置に来る場所詞も必須項であると主張している。
- ② 「ていた」「れ・られていた」「であった」も含む。
- ③ 作品やコーパスについて、次のようなものを使った。(1)山崎豊子2002『白い巨塔』新潮社、東野圭吾2006『容疑者Xの献身』文藝春秋、小川洋子2003『博士の愛した数式』新潮出版、(2)『新潮文庫の100冊』新潮社1996、『明治の文豪』新潮社1997、『大正の文豪』新潮社1997、『新潮文庫の絶版100冊』新潮社2000、(3)『朝日DNA一聞蔵』朝日新聞社インターネット版、(4)《中日対訳語料庫》（北京日本学研究中心2003）、(5)荻野孝野・小林正博・井佐原均編著2003『日本語動詞の結合価』三省堂、(6)筆者作成のHPブログコーパス。
- ④ 「NPが+Vている（た）／れ・られている（た）／てある（た）／れ・られてある（た）」だけでも眼前の情景描写に用いられることがあり、また、「Lに+NPが+Vた」は、存在構文と見なして良いものもあるが、それについては何れも別稿に譲り、ここでは触れないことにする。

- ⑤ 小野尚之 (2005) も次の用例を挙げている。a. 公園には親子連れが遊んでいる。b. 三階には若い女の人が働いている。c. 池には真っ赤な鯉が泳いでいる。d. 新生児室には今日生まれた赤ちゃんが眠っている。
- ⑥ 非能格自動詞存在構文については更なる考察が必要であるが、それについては別稿に譲り、ここでは掘り下げないことにする。
- ⑦ 詳細については早津恵美子 (1989) を参照。
- ⑧ 要するに意志性の介入や行為の影響がどこにかかわるのかという点において、両者は異なるだろうと思われる。
- ⑨ 例えば、「a.*この川には水が凍っている。」「b.*南側の道路には雪が融けている。」「c.*庭には書類が燃えている。」に用いられる動詞は非対格自動詞であり、「ている」と共起しているにもかかわらず、文は非文である (用例はNakajima (2001:57) からの引用)。

参考文献

- 一戸克夫 2001 結果構文テアルにおけるアルの存在動詞としての性質について、「意味と形のインターフェース」くろしお出版
- 小野尚之 2005 『生成語彙意味論』くろしお出版
- 影山太郎 1996 『動詞意味論－言語と認知の接点－』くろしお出版
- 岸本秀樹 2003 日本語の存在・所有文の文法関係について、伊藤たかね編『文法理論：レキシコンと統語』、東京大学出版
- 金水 敏 1982 人を主語とする存在表現－天草版平家物語を中心に－、『国語と国文学』59-12
- 金水 敏 1998 「あり」「みる」「をり」＝存在の表現の意義、『国文学解釈と教材の研究』43-11
- 佐治圭三 1991 『日本語の文法の研究』(1996、3刷り) ひつじ書房
- 柴谷方良 1978 『日本語の分析』大修館
- 杉村 泰 1994 『テアル構文の研究』(修士学位論文) 名古屋大学大学院文学研究科
- 杉村 泰 1996 形式と意味の研究－テアル構文の2類型－、『日本語教育』91号
- 高橋太郎 1976 すがたともくろみ、金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 谷口和美 2005 第3章 動詞の意味と構文の意味、『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 西山佑司 2003 第9章 名詞句の解釈と存在文の意味、『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』ひつじ書房
- 登田龍彦 2003 日本語における存在文と所有文の主語と尊敬語化について、『熊本大学教育学部紀要、人文科学』第52号
- 早津恵美子 1989 有対他動詞と無対他動詞の違いについて－意味的な特徴を中心に－、『言語研究』95 日本言語学会
- 原沢伊都夫 1998 テアル形の意味－テイル形との関係において－、『日本語教育』98号.
- 原沢伊都夫 1999 テアル能動型の主体の欠如について、『言語』28巻9号、大修館書店
- 原沢伊都夫 2005 テアルの意味分析－意図性の観点から－、『日本語文法』5巻1号

- 益岡隆志 1987 『命題の文法－日本語文法序説－』くろしお出版
- 吉川武時 1976 現代日本語動詞のアスペクトの研究、金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 李 恂定 1986 《現代漢語句型》商務印書館
- 呉 卸耀 2006 《現代漢語存現句》、学林出版社
- 于 康 2006 日語の処所動詞と存現句、《漢日語言對比研究》7、学苑出版社
- Adele E. Goldberg. 1995. *Constructions: A Constructions Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press. (河上馨作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳 2001『構文文法論－英語構文への認知的アプローチ』研究社)
- Bresnan, Joan. 1994. "Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar", *Language* 70.
- Iwamoto, Enoch and Kazuki Kuwabara. 1996. "On the Aspectual Property of Locative Inversion and the Status of pp", *Studies in Linguistics and Language Teaching* 7.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. MIT Press.
- Nakajima, Heizo. 2001. "Verbs in Locative Constructions and the Generative Lexicon", *The Linguistic Review* 18.
- Ono, Naoyuki. 2001. "Integrating Lexical Meanings with Constructional Meanings: Locative Inversion in English and Japanese", In Kaoru Horie and Shigeru Sato (eds.) *Cognitive-Functional Linguistics in an East Asian context*. Kuroshio Publishers.
- Yamamoto, Kazuyuki. 1997. "Locative Inversion in English and Japanese". In Ukaji, Masatomo, Masaru Kajita, Toshio Nakao, and Shuji Chiba (eds.). *Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*. Taishukan.

付 記

本稿は、2006清華大学日本語文化国際フォーラム（於北京清華大学、2006年5月28日）において行った口頭発表「存在構文からみた動詞の意味と構文の意味のかかわり」を加筆修正したものである。席上、尾上圭介先生や井上優先生から貴重なご意見を頂戴した。厚く御礼を申し上げる。

— う ・ こう、関西学院大学教授 —